

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：82622

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01213

研究課題名（和文）松方コレクション来歴研究とデジタル・カタログ・レゾネ試作

研究課題名（英文）Provenance Research on the Matsukata Collection and Prototype Digital Catalogue Raisonnn&#233;

研究代表者

川口 雅子（Kawaguchi, Masako）

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員

研究者番号：70392561

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、松方コレクション全容解明を推し進め、松方コレクションのカタログ・レゾネである『松方コレクション西洋美術全作品』（国立西洋美術館、2018-2019年）刊行時に未解決のまま残された問題を中心に、松方コレクション成立経緯とその後に行方を明らかにしようとするものである。本計画過程で、所在不明とされてきた作品の所在を新たに確認し、美術館や個人宅等で現地調査を実施し、作品裏面等に残された一次資料の確認を行い、来歴について部分的推論を立てることができた。デジタル・カタログ・レゾネのプロトタイプ試作に関しては、新クラウド環境においてデータ管理機能やインターフェース等の検証に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、美術作品そのものを取り扱う美術館の現場で取り組む点に学術的独自性を備えるものである。近年、欧米の来歴研究では、アーカイブ資料や学術文献に加え、作品自体の裏面に残された画商ラベルや展覧会ラベル、書込み等が重要な情報源として注目されている。作品自体に残る歴史的痕跡を一次資料として重要視するこの実践的アプローチは、大学などの研究室で行われる美術史研究とは異なる独自性を発揮するものであったと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the origins of the Matsukata Collection and the subsequent whereabouts of its artworks, focusing primarily on issues that remained unresolved at the time of the publication of the catalogue raisonne; "The Matsukata Collection: Complete Catalogue of European Art" (National Museum of Western Art, 2018-2019).

During the course of this project, we were able to newly confirm the whereabouts of artworks previously considered missing, conduct on-site investigations at museums and private residences, verify primary documents left on the backs of artworks, and hypothesize about their provenance. Additionally, we developed and tested a prototype digital catalogue raisonne;, focusing on verifying data management functionalities and interfaces within a new cloud environment.

研究分野：美術情報論

キーワード：松方コレクション 来歴研究 カタログ・レゾネ アート・ドキュメンテーション 松方幸次郎 コレクション形成史 アーカイブ 西洋美術史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

国家間の戦争、植民地支配下での略奪等にかかわる文化財返還問題は美術史にも影響を及ぼしてきた。欧米では 1990 年代末以降、独ナチス略奪美術品問題を機に美術品の来歴研究 (provenance research) が興隆するに至っている。そこで問題となるのは、作品が過去から現在に至るまで、いつ誰の所有に帰してきたかということである。来歴の空白は、所有権の法的正当性を曖昧にし、美術作品そのものの取扱い (公開・貸出・購入・売却等) に不利な状況をもたらす。この動きと軌を一にして広域的視点によるコレクション形成史研究が進展し、社会のグローバル化と共にその対象は日本のコレクションにも広がった。日本の印象派コレクションを画商・林忠正や実業家・松方幸次郎から歴史的に紹介した展覧会「Japan's Love for Impressionism」(2015 年、ボン) の大きな反響はこの潮流の証左といえる。一方、来歴調査の重要なリソースとして、美術作品の総目録である「カタログ・レゾネ (catalogue raisonné)」のあり方も再注目され、紙から電子媒体へと書籍流通モデルが移行するなか、「デジタル・カタログ・レゾネ」に対する模索が各国で始まっている。

こうした国際動向と比べて、わが国における来歴研究は十分とはいえない。関連のアーカイブ公開やカタログ・レゾネ出版も遅れ、研究環境の整備も停滞している。東京美術倶楽部のカタログ・レゾネ・シリーズ刊行等の例外はあるが、国内美術館や美術市場における来歴軽視の風潮を反映し、来歴データは収録対象となっていない。所蔵品の来歴データを公開する美術館もまだ少ない状況にある。

とはいえ近年、西洋美術作品を所蔵する美術館を中心に草創期からの記録資料の見直しと来歴調査及びその成果を展覧会や所蔵品目録に反映させる動きが見られ、日本の西洋美術コレクションの形成史全体を問い直す機運は高まりつつあると言える。代表者らが勤務する国立西洋美術館設立の基礎となった松方コレクションはそうした日本の初期の西洋美術コレクションの中で規模と歴史性において中心的位置を占め、海外からの関心も高い。20 世紀初頭、松方が美術館建設を目標に築いたコレクションは当初 3 千点を超える西洋美術品と約 8 千点の浮世絵から構成されていた。その後、多くが散逸・焼失する中、第二次世界大戦中にフランス政府による接収を経て戦後日本へ寄贈返還された約 400 点の保管・展示のために 1959 年に設立されたのが国立西洋美術館である。

国立西洋美術館は日本の西洋美術研究拠点の一つである研究資料センターを擁し、美術のドキュメンテーション環境整備に努めつつ、松方コレクションを中心に来歴研究を行ってきた。2016-2019 年度にかけて科学研究費「在外松方コレクション資料の学術調査と美術品来歴研究」(16H05668) を得て海外アーカイブ調査を実施、その成果をカタログ・レゾネ『松方コレクション 西洋美術全作品』(2018-2019 年) の編纂や「開館 60 周年記念 松方コレクション展」(2019 年) の開催、国際シンポジウム「カタログ・レゾネ」(2019 年) の実施等に反映した。とくに日英二か国語で刊行した本カタログ・レゾネは海外の図書館にも収蔵され、一定の評価を得るに至っている。だが、その反響で新たな作品・資料情報もたされることにもなり、これまで蓄積してきた情報や資料の整理を継続しつつ、さらなる来歴調査とカタログ・レゾネ改訂の必要が課題として浮上した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、松方コレクション全容解明に取り組んできた国立西洋美術館のこれまでの研究を推し進め、松方コレクションのカタログ・レゾネである『松方コレクション 西洋美術全作品』全 2 巻 (2018-2019 年) 刊行時点で未解明のまま残された問題を中心に、松方コレクション成立経緯とその後の行方を明らかにしようとするところにある。国立西洋美術館が所蔵する松方旧蔵品はごく一部であり、東京国立博物館に一括所蔵される浮世絵を除いて、松方コレクションの大部分は現在散逸しており、その全容解明にはコレクション形成および散逸経緯の追跡調査が必要である。また明治期以降早くから日本にもたらされていた西洋美術作品のなかには、戦後、美術市場において故意に松方コレクションと偽られた作品もあり、本研究では作品所蔵先での現地調査及び国内外の資料所蔵機関における資料調査を通じて、これらの事実関係を解きほぐしていく。

(2) また紙の書籍である『松方コレクション 西洋美術全作品』を応用し、研究の進展による持続的な改訂を可能にする手段として、デジタル・カタログ・レゾネのプロトタイプを作成する。従来日本のカタログ・レゾネでは看過されてきた来歴データをその中に位置づける。これにより、日本の学術出版の手段としてデジタル・カタログ・レゾネの有効性を検証すると共に、わが国に来歴研究という学問領域の地平を切り拓き、日本国内の美術館、芸術文化の領域にインパクトを与えることを目指す。

3. 研究の方法

2016-2019 年度の科学研究費「在外松方コレクション資料の学術調査と美術品来歴研究」(16H05668)で未解明のまま残された問題を中心に、国内外の研究者とのネットワークを構築しながら、情報収集に努め、作品および関連資料の所在把握を行っていく。世界各地の美術館、個人コレクター宅、画商、美術研究所、文書館（アーカイブ）、図書館等を訪問し、作品の実見および資料調査を行う。これらの成果を取り込みつつ、『松方コレクション 西洋美術全作品』編纂時に活用した作業用簡易データベースを土台とし、デジタル・カタログ・レゾネに必要な機能と構成、インターフェースを実装する。国内外で収集したアーカイブ資料（手紙、日誌、作品売買記録、所蔵品台帳、画廊ラベル、作品調査時の写真記録等）やドキュメンテーション資料（新聞・雑誌記事、展覧会カタログ等）は、研究資料アーカイブとして整理する。

(1) 松方コレクションに関する作品現地調査と資料収集

『松方コレクション 西洋美術全作品』(2018-2019年)刊行後の反響として、所在不明であった作品について所有者から情報等が寄せられており、こうした最新情報を活用して現地に訪問し、書込みや画商ラベルの確認等に重点を置いた作品調査を行う。現地調査から得られた成果を記録や文献等で裏づけしながら、未解明のまま残されていた課題について解明を試みる。作品調査と並行して、ヨーロッパや米国・日本各地の文書館、図書館、美術史研究所、画商アーカイブ、関係者遺族の手元に保管されている作品売買の記録や展示記録等の資料調査を進める。

(2) 研究資料アーカイブ構築

国内外で収集した作品調査資料（裏面ラベルの写真記録等）、アーカイブ資料（手紙、日誌、売買記録、台帳の写し等）やドキュメンテーション資料（新聞・雑誌記事、展覧会カタログ等）を整理し、松方コレクション研究資料アーカイブとして蓄積・整理する。他機関から提供を受けた資料の公開は権利上難しいが、国立西洋美術館研究資料センターという研究拠点を通じて支障のない範囲で内外研究者との資料共有を図っていく。一方、国立西洋美術館の松方旧蔵品については学芸員と情報専門職との協力体制により作品裏面ラベルや額等の再分類・整理を集中して行う。

(3) デジタル・カタログ・レゾネのプロトタイプ試作

国立西洋美術館は得られた知見を総合し、蓄積するプラットフォームとして、これまで所蔵作品管理システムを応用した作業用簡易システムを作成し使用してきた。これを土台として、内外研究者がデジタル・カタログ・レゾネとして利活用するための検索機能とインターフェースを実装し、将来の外部公開に向けて体裁を整える。情報の国際発信を前提として、必要に応じて英文翻訳を実施し、来歴データを含む全データの二か国語提供を目指す。その際、伝統的なカタログ・レゾネ編纂拠点として知られ、デジタル・カタログ・レゾネ制作にも着手したウィルデンスタイン・プラットナー研究所や、ポール・セザンヌの先端的デジタル・カタログ・レゾネで知られる研究者ヴァルター・ファイルヒェンフェルト氏らとの間で築いたネットワークを生かし、最新動向の把握と反映に努める。

(4) 国内外の美術館、美術史家とのネットワーク構築

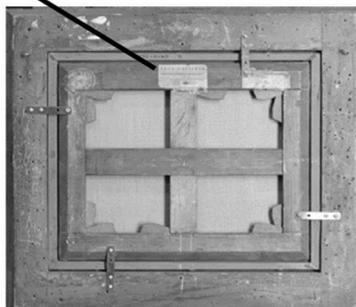
最新の来歴研究やカタログ・レゾネに関する国際動向の把握のため、国際シンポジウムやセミナー等に参加し、関係者との情報交換とネットワーク構築に努める。これまでに国内外でオルセー美術館、ロダン美術館、ウィルデンスタイン・プラットナー研究所、デュラン＝リュエル画廊（以上、パリ）、フランス建築文化財メディアアテーク（モンティニー＝ル＝ブルトンヌ）、カッシーラー画廊アーカイブ（チューリヒ）、ゲティ研究所（ロサンゼルス）、アーティゾン美術館（東京）ほか、多数の研究者個人とも協力関係を築いており、引き続き関係強化を図ると共に、新たな研究連携の可能性を追求する。

4. 研究成果

本研究は、美術作品そのものを取り扱う美術館の現場で取り組む点に学術的独自性を備えるものである。近年、欧米の来歴研究では、アーカイブ資料や学術文献に加え、作品自体の裏面にある画商ラベル（gallery labels、右図）や展覧会ラベル、書込み等が重要な情報源として注目されている。作品自体に残る歴史的痕跡を一次資料として重要視するこの実践的アプローチは、大学などの研究室で行われる美術史研究とは異なる独自性を発揮するものであったと考える。

この点を踏まえ、松方コレクションに関する作品現地調査については、これまで所在不明とされてきた作品の所在を新たに数点確認し、現地で調査を行うことができた。主なものは以下

作品裏面の画商ラベルの例



のとおりである。

まず『松方コレクション 西洋美術全作品』第2巻補遺に掲載された資料写真がきっかけで、写真に記録されている作品のうちの1点が現在姫路市立美術館に所蔵されているマティス《ニース郊外の風景》である可能性が浮上した。掲載写真は、フランスの建築文化財メディアテーク写真部門で近年発見されたガラス乾板で、戦前、当時ロダン美術館に保管されていた松方コレクションを撮影したものである。2021年、姫路市立美術館のご厚意により現地で作品調査を行うこととなり、額の裏板を外すなど手間のかかる作業を実施いただき、来歴や展覧会出品歴に関わるラベル類のほか、木枠に記された書き込みなどを実見する機会を得た。本調査に関して、研究分担者の陳岡が『姫路市立美術館研究紀要』第19号(2020年)に研究報告を行っている(陳岡めぐみ「失われた松方コレクションのマティスの行方」)。

このほか、京都の個人コレクターの元に昭和初期の松方コレクション売立に出品された油彩作品が所蔵されていることが判明し、現地で調査を行った。作品の額裏や裏板には、昭和初期の売立の出品ラベルのほか、松方の他のイギリス購入作品に散見されるローソン＝ピーコック画廊とフレンチ・ギャラリーのラベルが残されていることが観察され、そこから松方が本作品をロンドンで購入したと推論を立てることができた。

さらに、一般社団法人霞会館が所蔵する油彩作品2点が松方旧蔵品であることが新たにわかり、調査の機会を得た。この2点は同会館の前身である華族会館が第二次大戦末期の昭和19年に十五銀行から寄贈されたものである。十五銀行は昭和金融恐慌(昭和2年)の後、当時川崎造船所社長であった松方よりまとめて作品を提供された法人である。同会館には十五銀行から華族会館への所有権移転に関する文書も保管されており、文書が示す来歴や作品名称などから、いずれも1929(昭和4)年4月に東京府美術館で開催された「松方氏蒐集欧州綴織及絵画展覧会」への出品作品であることが確認できる貴重な発見であった。なお、2024年5月に開催された霞会館記念展覧会「明治天皇と華族会館」(明治神宮ミュージアム)の展覧会カタログ論文では、本研究代表者・分担者らの松方コレクション研究の成果が採用されており、間接的にはあるが、前段階を含めた一連の本研究計画が学術の振興・普及に寄与することのできた一例とみなすこともできよう。

以上が主要な現地調査の結果であるが、これ以外にも各地の個人宅等で調査の機会を得ることができた。そのうちの一部については、国立西洋美術館に収蔵されることになったものもある。調査研究が美術館の作品収集活動へと密接に結びついた事例となったといえる。

続いて資料収集に関しては、海外の美術品取引市場を通じて、1920年代に松方の作品購入に関連して交わされた書簡の現物を入手し、内容の確認を行うことができた。松方コレクションに関して、近年、海外オークションで来歴関連のアーカイヴ資料の売却が行われることが続いており、今後もこの動向は注視していく必要がある。このほか収集することのできた作品資料の写し(裏面ラベルの写真記録等)やアーカイヴ資料の写し(手紙、日誌、作品売買記録、所蔵品台帳、画廊ラベル、写真記録等)、ドキュメンテーション資料の写し(新聞・雑誌記事、展覧会カタログ等)については、計画期間の完了後も継続して松方コレクション研究資料アーカイヴとして地道な整理作業に取り組み、外部からのアクセスと利便性について検討していく予定である。

一方、本研究計画のもう一つの柱であるデジタル・カタログ・レゾネのプロトタイプ試作に関しては、それまで使用してきた作業用簡易システムを容量の十分確保された新クラウド環境に移行させ、新環境においてデータ管理機能やインターフェース等の分析検証に取り組んだ。

旧環境の作業用簡易システムは『松方コレクション 西洋美術全作品』への出力を前提に整備したもので、あらゆる点でカタログ・レゾネという海外の学術出版物の文法に基づいた設計となっている。カタログ・レゾネ本体の作品データに含まれる来歴や展覧会歴・文献歴の各項目と、巻末補遺に掲げた多岐にわたる一覧・索引類、具体的には出版物一覧・作品番号対照表(コンコードダンス)・松方コレクション売立一覧・展覧会略称一覧・来歴索引・所蔵者別索引といった各表との対応関係をシステムで表現することは、日本では前例のないプロジェクトであり、大きな挑戦である。新環境において、既にシステムに保管されている構造化データを複数テーブル間で確実に連携させ、インターフェース上のしかるべき位置にしかるべき形式で表示させるためには、松方コレクション研究に携わる人文系の研究者とシステム開発者との間での課題共有と検討に綿密な議論が不可欠であったが、途中、コロナ禍もあり、計画期間内には目標を十分に達成することは叶わなかった。この問題の解決には、本計画完了後も将来にわたって取り組んでいくことが必要と考えている。

国内外の美術館とのネットワーク構築に関しては、ロダン美術館およびフランス国立美術史研究所(いずれもパリ)の職員およびインディペンデント・リサーチャーらを訪問し、関連するアーカイヴ資料の所在などについて情報交換を行った一方、戦後の松方コレクション返還交渉で大きな役割を果たしたフランス外務大臣ロベール・シューマンについて、メッス近郊シ・シャゼルのロベール・シューマン記念館を訪問し、同館学芸員と戦後の国際間の文化財返還をめぐる状況、また今後の研究計画等について意見交換を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 陳岡めぐみ	4. 巻 28
2. 論文標題 松方コレクションとパリの画商 INHA所蔵のレオンス・ベネディット資料の紹介（2）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国立西洋美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 陳岡めぐみ	4. 巻 27
2. 論文標題 松方コレクションとパリの画商 INHA所蔵のレオンス・ベネディット資料の紹介（1）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国立西洋美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川口 雅子	4. 巻 27.28
2. 論文標題 カタログ・レゾネ編纂と美術作品のドキュメンテーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アート・ドキュメンテーション研究	6. 最初と最後の頁 3~17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24537/jads.27.28.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 馬淵明子	4. 巻 2021年冬号
2. 論文標題 型紙 海外に渡った日本デザインの宝庫	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Approach	6. 最初と最後の頁 16~18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳岡めぐみ	4. 巻 19
2. 論文標題 失われた松方コレクションのマティスの行方 アンリ・マティス《ニース郊外の風景》(姫路市立美術館「國富奎三コレクション」)の来歴調査報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 姫路市立美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 2~6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 馬淵明子	4. 巻 26
2. 論文標題 国立西洋美術館の7年8か月 館長から見た国立美術館の活動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立西洋美術館研究紀要	6. 最初と最後の頁 5~23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 9件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 川口雅子
2. 発表標題 「電磁的記録の作成・公開」は「デジタル・アーカイブ化」と同義か?
3. 学会等名 全国博物館フォーラム(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒澤美子[ほか](鼎談)
2. 発表標題 ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズそしてドキュメンテーションを語る
3. 学会等名 オンラインワークショップ「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズの地平: その過去・現在・未来を見とおす」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川口雅子
2. 発表標題 なぜロダン《考える人》が東京にあるのか あらためて問うコレクション来歴研究の意味
3. 学会等名 2022年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川口雅子
2. 発表標題 博物館情報のデジタル化・アーカイブ
3. 学会等名 日本博物館協会フォーラム「改正博物館法施行間近！ 現場の視点で改正法のポイントを考える」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 陳岡めぐみ
2. 発表標題 “ The Matsukata Collection ”（同時通訳）「松方コレクション」、ラウンドテーブル「日本におけるフランス絵画」「コレクション形成史と美術館の創設」
3. 学会等名 10e Festival de l' Histoire de l' art, France-Japon: Influences miroirs, Chateau Fontainebleau（主催：フランス文化省、フランス国立美術史研究所）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬淵明子
2. 発表標題 美術館におけるコレクション・展覧会・調査の総合的成果の一例 松方コレクションを巡って
3. 学会等名 東京藝術大学美術学部芸術学科（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 馬淵明子
2. 発表標題 「日本人にとってのジャポニスム」
3. 学会等名 ジャポニスム学会40周年記念フォーラム『ジャポニスムとは何か』（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬淵明子
2. 発表標題 西洋の女性画家の環境
3. 学会等名 日本比較文学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川口雅子
2. 発表標題 カタログレゾネはなぜ必要か
3. 学会等名 立教大学人文研究センター公開シンポジウム「奈良美智のオンライン・カタログレゾネ・プロジェクト 現代美術のドキュメンテーション考」（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 陳岡めぐみ（共著：代表著者名 袴田紘代）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国立西洋美術館	5. 総ページ数 272
3. 書名 憧憬の地ブルターニュ（論文名「松方コレクションとブルターニュ」）	

1. 著者名 ジャポニスム学会（共著、馬淵明子）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 344
3. 書名 ジャポニスムを考える	

1. 著者名 陳岡めぐみ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国立西洋美術館	5. 総ページ数 263
3. 書名 自然と人のダイアローグ	

1. 著者名 Text(s) by Nadine Engel, Francis Fowle, Peter Gorschluter, Rebecca Herlemann, Megumi Jingaoka, et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Hatje Cantz Verlag	5. 総ページ数 376
3. 書名 Renoir, Monet, Gauguin: Images of a Floating World The Kojiro Matsukata and Karl Ernst Osthaus collections	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	陳岡 めぐみ (Jingaoka Megumi) (50409702)	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員 (82622)	
研究分担者	馬淵 明子 (Mabuchi Akiko) (30114656)	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・その他部局等・館長 (82622)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	黒澤 美子 (Kurosawa Yoshiko) (20642838)	独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員 (82622)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関